二

白山の山並みに源を発する浅野川と犀川の二つの流れに挟まれるように広がった加賀金沢百二万石の城下町に、磐音は朝霧の残る中、辿りついた。

「加賀は天下の書府である」

と大名文化を誇り、

「加賀文化から武家の文化を除くとあとはなにも残らない」

と表現される加賀へ辿りつくまでには厳しい歴史があった。

親鸞を開祖にした浄土真宗は、北陸にも伝播する。

文明三年には京の本願寺八世蓮如が越前と加賀の国境、吉崎に学堂を設け、講によって固い絆で結ばれた一向宗の門徒団が、在地の守護に対して、一揆を繰り返すまでになる。そして、ついには、守護を加賀一円から放逐して、

「百姓の持ちたる国」

が誕生するのである。さらには天文十五年には金沢御堂が置かれて、一向宗はさらに強固な絆を作り上げていった。

だが、ひゃくねんの栄華のあと、天正八年、天下をほぼ手中にしつつあった織田信長は、柴田勝家の軍勢を送り、金沢御堂を陥落させた。

その三年後、加賀百万石の礎を築く前田利家が入城してくるのである。

これを境に加賀は、

「百姓の持ちたる国」から、

「武家文化」の国に変貌を遂げるのである。

「……天下の書府」

と言われる加賀文化を齎したのが五代綱紀の御世だ。綱紀が亨保八年に隠居した後、吉徳、宗辰、茂熈、重靖、重教を経て十一代治中の時代を迎えていた。

磐音は小立野台地に聳える金沢城を犀川大橋から眺め、まずは宿を探そうと思った。

橋の北詰に渡った磐音は川沿いに上流へと上がり、町家と推量される左手に入り込んだ。

するとそこは、裏店が軒を並べ、職人衆が働く界隈が広がっていた。そんな一角に旅籠の土蔵屋を見つけた。

「ごめん」

まだ昼前だ、そのことを気にしながら部屋を問うと、

「へいへい、ございます」

と三畳ながら一人部屋をあてがってくれた。

「夜旅をして参った、少々腹が空いておる。朝餉を馳走してくれぬか」

「ならば、台所に行きなされ」

三日分の旅籠賃を前払いした磐音は、その足で台所の囲炉裏端に行った。

女子衆がすでに朝餉の後片付けをしていたが、鍋に残った味噌汁を温め直してくれた。

磐音は酒を茶碗で一杯貰い、囲炉裏端でゆっくりと飲むうちに鮴と香の物と味噌汁がぜんで出てきた。

「おおっ、これはうまそうな」

磐音は茶碗に残った酒を飲み干すと、徹夜の空腹を満たすように膳に向かった。

暮れ六つ、磐音が犀川大橋北詰に立ったとき、北国の城下町はとっぷりと暮れていた。

磐音は昼間、土蔵屋の三畳で寝て過ごした。夕刻前に起き上がって、ふらりとでてきたところだ。

着流しに菅笠姿では、鍛え上げられた磐音にも寒さが身に染みた。といって綿入れを着込む気はない。永平寺の参禅修行のことを思えばなにほどのことでもない。

橋を城に向かうと、金沢の家臣たちを相手にする仏具屋、古道具屋、酒屋、米屋、蔵宿、手判問屋、呉服太物屋、扇子屋、袋物屋、質屋など六十一軒の大店で構成される片町が現れる。

「お待たせしましただ」

愛蔵がどこかさっぱりした顔付きで橋を渡って姿を見せた。

「無事であったか」

へえっ、お影様でと答えた愛蔵が、あ

「坂崎様は強うござえますな、びっくりしただ」

愛蔵は娘たちを連れて逃げながらも磐音の戦いぶりを見ていたようだ。その愛蔵が磐音を案内するように旅籠の土蔵屋がある職人町へと歩き出した。

磐音も肩を並べた。

「娘たちを妓楼に届けたか」

「へえ、これで残された家族が二、三年はなんとか暮らしていけますベえ」

「年季明けまで無事に勤め上げられるとよいがな」

磐音の言葉に愛蔵は何も答えなかった。遊女務めはそれほど簡単でないことを愛蔵は骨身に染みて承知していた。

細い路地に入り込むと酒と煮物の匂いが漂ってきた。

間口の狭い煮売り酒屋では職人たちや馬方たちが酒を飲んでいた。

「こちらへどうぞ」

愛蔵は磐音を入れ込みの板の間に招き上げた。そして、手際よく小女に酒と魚を注文し、顔を磐音に向けた。

「坂崎様、犀川河岸にも浅野川沿いの遊女屋にも奈緒様の影はねえだ」

「となると、そなたが申した高禄の家臣の妾か」

「へえっ」

小僧によって銚子に入った酒が運ばれてきた。愛蔵がそれを貰うと磐音の杯を満たし、自分にも注いだ。

「世話になるな」

「なんの、坂崎様には面倒かけただ」

「愛蔵どの、奈緒どのを探る手立てはないか」

「京の島原から番頭が付き添ってきたちゅう話なれば、どこぞの色町筋に繋がりがなければなんねえ」

愛蔵が首を傾げたとき、煮売り酒屋の入り口に新たな客が立った。遊び人のような風体の男が愛蔵の姿を認めると、

「父っつぁん」

と声をかけた。

「おおっ、来ただか」

愛蔵はこの男と落ち合うことを約束していたのか、手招きして自分の傍らに座らせた。

「坂崎様、おらの知り合いの鶴吉さんだ。江戸の生まれだが、ちいと事情があって、この数年、城下に住みついているだ」

「世話をかける」

坂崎は頭を下げた。

「分かりました」

「おおっ、探りだしただか。さすがに鶴さんだ」

愛蔵が言い、自分が飲み干した杯を鶴吉の手に握らせると酒を注いだ。

「観音坂下の玉松楼に、女を連れた京者らしい男が入ってらあ、十日ほども前のことだぜ」

磐音が永平寺に参禅していた日にちを考えると符合する。

「女は奈緒様と見て間違いねえべえか」

「玉松楼の下女を呼び出して銭を摑ませたら、喋りやがった。名は知らねえそうだが、武家の出で、絶世の美形だそうだ。父っつぁん、まず間違いあるめえ」

「玉松楼は奈緒様を買ったべえか」

「買った。ただし、玉松楼が銭を出したんじゃねえや」

「八家衆か」

「玉松楼に、尾張町の御用商人、米の仲買商三河屋の番頭が何度か、出向いてきている。大金が出たとしたらここいらあたりだぜ」

「おおいにありうるこっだ。鶴吉さん、肝心の奈緒様はまだ玉松楼かねえ」

「父っつぁん、玉松楼に三日ばかりいたことは確かだ。だが、その後、駕籠に乗せられてどこぞに連れて行かれたそうだ」

と言った鶴吉は、磐音の顔に視線をちらりと這わえると、

「わっしの調べはこんなとこだ。女の行った先を手繰るかい」

と愛蔵に訊いた。

愛蔵が磐音を見た。

磐音は頷くと懐から財布を出し、

「これしか礼ができぬが」

と断りながら三両を愛蔵に差し出した。

「遠慮なく頂戴しますだ」

と愛蔵が一両を受け取り、二両を鶴吉に渡した。鶴吉は左手で小判を掴んで袖に入れ、

「旦那、どこに泊まっていなさるね」

と訊いた。

「河原町の土蔵屋と申す旅籠だ」

「分かった。明日にも連絡をつけるぜ」

杯に残っていた酒を飲み干した鶴吉は、ふわりという感じで立った。懐に合口でも飲んでいそうな気配だ。去り際に鶴吉が訊いた。

「父っつぁん、いつ城下を発つな」

「関所役人から眼をつけられてらあ。長居は禁物、明日にも発とうと思う」

鶴吉は頷くと店の外に出ていった。

「坂崎様、あれで鶴吉は信用できる男だ。あいつが金沢に流れてきたときからの付き合いで、もう三冬を迎えるだ」

「愛蔵どのは明日発たれるか」

「へえっ、奈緒様の行方を知っていからと思わねじゃねえが、城下の色里のことなら、おらより鶴吉が頼りになる。おらがのこっても無駄飯だ」

「明日は別れか。ならば今宵は酌み交わそうか」

磐音と愛蔵は、短い縁を惜しむように鯊の佃煮を肴にゆっくりと酒を飲んだ。

翌朝、磐音の姿はまだ暗い犀川の河原にあった。

手には土蔵屋で借りてきた、四尺ほどの長さの心張り棒があった。

磐音は、愛蔵と飲み交わした酒を体から搾り出すように心張り棒を振るい始めた。

四半刻ほどもすると、磐音の体じゅうから酒臭い汗が流れ出してきた。されに半刻ほどの心張り棒での素振りを続けた後、動きを止めた。

呼吸を整え直した後、心張り棒を河原に置き、両足の位置を定めた。

坂崎家伝来の豪刀、備前包平の柄に右手をかけ、その手を離した。

右の拳をだらりと下げ、腰を沈めた。

白み始めた空に一点を凝視した磐音が無音の気合いとともに右手を躍らせ、二尺七寸の長剣を抜き上げた。

振り上げた剣を反転させると、朝の大気を両断するように斬り下ろした。

刃が鈍く輝いて光になった。

湿った空気が二つに割れた。

磐音はその動作をなおも四半刻あまり繰り返した後、稽古を終えた。

朝餉を食し終えた磐音は、日が差してきた城下へと出た。

昨日の昼間は、徹夜明けの体を休めるために寝て過ごした。夜は夜で愛蔵と酒を酌み交わし、城下を歩いたのは犀川の北詰界隈だけだ。

磐音はまず片町に出ると城へと向かった。外堀に架かる香林坊橋から御本丸を正面に見て、屋敷町を左回りに歩いていった。

まず磐音は金沢城の大手先の尾坂門を遠くから眺めて、八家衆、人持組の広壮な屋敷が門前を連ねる武家町をぶらぶらと歩き、金沢百二万石の威容に感心した。

豊後関前藩も同じ城下町だが、残念ながら比較にもなにもならなかった。なにしろ家老職の禄高と関前野領地はほぼ一緒なのだ。

あてもなく歩く磐音の耳に懐かしい袋竹刀で打ち合う音が響いてきた。音を頼りに行くと屋敷町の中に堂々とした道場が現れた。立地から見て、加賀藩の家中の子弟たちが通う道場だろう。

看板には富田流道場とあった。

（おおっ、これが名高き越前朝倉家の臣、富田九郎左衛門長家が興した富田流か）

門番はいなかった。

磐音は敷地に入ると、式台の前でご免と声をかけた。すると道場から稽古着姿の若い門弟が出てきた。

「卒爾ながらお願いがございます。それがし、ゆえあって当地に滞在しておるものですが、城下見物をしているうちに当道場の前を通りかかりました。できますならば、お稽古を見学させてはもらえませぬか」

磐音の丁重な挨拶に若い門弟が、暫時お待ちをと奥に姿を消した。が、直ぐに壮年の門弟と一緒に戻って来た。

「見学を望まれるはそなたか」

「さようにございます」

「師範代の佐々木南じゃ。お手前の姓名と流儀はいかが」

「それがし、坂崎磐音と申します。昨年まで江戸は神田三崎町の直心影流佐々木玲圓門下にございました」

「おおっ、佐々木先生の門弟か。上がられよ」

と見学を快く許してくれた。

さすがに加賀金沢城下の道場だ。内部は間口十五間奥行き二十五間の広さで、上段の間や左右の細長い見学席を省いても四百畳ありそうな板の間に、百数十人の門弟たちが稽古をしていた。

「こちらに参られよ」

なぜか磐音は見学席を伝って上段の間近くまで案内された。

「お好きなだけ見学なされよ」

佐々木は上段の間に控える道場主のもとに、磐音のことをか、報告に行った。上段の間では、道場主の他に家中の重臣とおぼしき老人が見学していたが、磐音のほうをみてはなにごとか話し合っていた。

磐音の注意はすでに稽古にいっていた。

富田流は、中条流祖の中女兵庫助から甲斐豊前守、大橋勘解由左衛門と伝承されて、富田九郎左衛門に嫡伝された剣技だ。

この九郎ざえもんから数えて三代目の治部左衛門景政は、前田利家公に使えて四千石を頂いていた。さらに隠居して支藩、能登七尾城代になっていた。富田流は加賀藩と深く結びついた武術なのだ。

上段の間に控えるのが当代の富田治部左衛門であろう。

稽古は実戦の気風を残していた。

磐音がそのようなことを考えながら稽古を見学していると、ふいに、

「やめ！」

の声がかかり、門弟衆が左右の見学席際に引いた。すると突然、

「坂崎どの」

と道場主から声がかかった。

「富田源昌にござる。そこもとは、佐々木玲圓先生の門下と聞き及んだ。どうかな、稽古着に着替えられては」

「ご門弟衆の邪魔にはなりませぬか」

「なんのなんの」

磐音は誘われるままに控え部屋に入り、用意された洗いたての稽古着に袴を着けると、気持ちがぴしりと引き締まった。

道場に戻った磐音を佐々木南が迎え、袋竹刀を差し出して、

「お相手つかまつる」

と言い出した。門弟たちもまた手を休めて二人の立合い稽古を見学する気だ。

「師範代自らお相手とは恐れ多いことにございます」

「先生のご命にござれば」

磐音は仕方なく佐々木南と袋竹刀をあわせる仕儀に立ち至った。

「坂崎どのは、江戸神田三崎町で猛稽古にて知られた佐々木玲圓先生の門下である。江戸の剣術を知るよき機会じゃ、とくとその業前を見せてもらうのじゃぞ」

富田源昌が言い出し、磐音はさらに気を引き締めった。

磐音と南は、正座して対面した。

「未熟者にございます。お手柔らかに」

磐音の挨拶にすでに顔を紅潮させた佐々木南が、

「こちらこそよしなに」

トレイを以て応じた。

「いざ！」

南の家に二人は同時に立ち上がった。

間合いは二間。

南は上段に構え、重厚鉄壁な備えに見えて、いつでも攻撃に転じる、攻防自在の態勢だ。

磐音は、袋竹刀を正眼に構え、ゆったりとした姿勢を取った。

居眠り磐音の待ちの剣法だ。

「おう」

南が、半歩踏み込み半歩後退する間合いから磐音を挑発した。

だが、磐音は動かない。

居眠り剣法が待ちに入ると、春先の縁側で年寄り猫が日向ぼっこでもしてるように微動だにしない。

その様子は春風駘蕩として、力が入ったところがない。といって隙も見えない。対戦の相手は踏み込むための今一つの気迫に迷い、機運を失することになる。

焦れたのは佐々木南だ。

前進後退する間合いから突然飛び込みながら。

「面！」

と磐音の脳天に重い一撃を振り下ろした。

磐音の袋竹刀が真綿で包むように擦り合わせ、力を拡散させた。

南はすでに袋竹刀を引き付けると肩口に狙いを変えた。が、それも巻き取られた。南は反対の肩口に電撃的な三撃目を送り込んだ。それも軟らかく弾かれた。

南はさらに迅速を増して、波状の攻めを仕掛けた。

攻撃しているのは南だ。

受けているのは磐音だ。

だが、富田源昌の目には、磐音の居眠り剣法の術中に嵌まり行く師範代の姿が映じている。

効果をを上げぬ連鎖の攻撃に焦れた南が一歩身を引こうとした構えを店、引き面を磐音の頭上に見舞った。

だが、磐音は下がる南と合わせるように踏み込むと、引き面を掻い潜っての抜き胴を送った。

びしり

と南の胴に磐音の袋竹刀が切れもよく、重く決まり、南が横手に吹き飛んだ。

道場に緊迫が走った。

「参りました！」

南の潔い声おと同時に言わねが正座して、

「ご指導ありがとうございました」

と呼応した。

上段の間でからからと笑う声が響いた。

富田源昌だ。

「ご隠居が犀川河原で見られた独り稽古は、やはり坂崎どののようですな」

と隣に座る老人に語りかけると、

「見たか、そのほうら。これが直心影流の妙技じゃぞ」

と門弟たちを見回した。

「坂崎どの、当地にはしばらく滞在なされるか」

「数日になるかあるいは長引くか、今のところわかりませぬ」

「犀川河原で稽古なされる時間、この道場に通われぬか」

「よろしいのでございますか」

「大きな池も水が流れ込まぬと濁る道理だ。そなたが、当道場に新風を吹かせてくれそうだ」

と源昌が嬉しそうに言い放った。